

氏 名 小山 周子

学位(専攻分野) 博士(学術)

学位記番号 総研大甲第 1647 号

学位授与の日付 平成26年3月20日

学位授与の要件 文化科学研究科 国際日本研究専攻
学位規則第6条第1項該当

学位論文題目 大正新版画の研究－版元を中心とした美術の成立、構造と展開

論文審査委員 主 査 教授 FISTER PATRICIA JEAN
教授 早川 聞多
教授 稲賀 繁美
館 長 小林 忠 岡田美術館
常任理事 渡邊 章一郎 国際浮世絵学会

論文内容の要旨
Summary of thesis contents

本研究では、1915年（大正4）より1950年代末頃まで続けられた版元を中心とした美術活動である大正新版画の成立、展開、その活動の構造を作品・資料の調査をもとにして考察を行った。

序章では、大正新版画の意義についてまとめるとともに、本美術活動に関する従来の美術史研究における問題点の指摘を行い、研究の背景を扱った。

第一部では、基本情報を洗い出し、明治後期から昭和までの流れを追い、新版画の成立から展開を概観した。

同第一章「新版画の開始—明治後期から1915年まで」では、明治後期の木版画をめぐる環境から1915年（大正4）の新版画開始に至るまでの状況を確認した。輸出用版画から新版画創始への過程と、両者の比較を行い、それらの特質を考察した。

第二章「新版画と浮世絵—大正期」では、新版画が一堂に紹介された展覧会「新作板画展覧会」に至る、その時代に参画した画家の作品を扱った。まず、展覧会までの版元、版画家が行っていた研究活動の一環である浮世絵研究を扱い、次に同展「目録」資料より、未発掘の参画画家を示し、従来触れられることのなかった各版画作品の販売価格についても言及した。

第三章「新版画の転換—関東大震災から昭和前期」では、関東大震災後から昭和前期における、渡邊庄三郎以外の各版元や新しい版画家の参画した情報を集め、この時期の版元活動、作品を整理した。そして、大正期の活動と比較を行い、新版画の変化を指摘した。

第二部では、新版画の諸問題について新資料等を用いながら検討を行った。

同第一章「新版画の誕生—小島烏水宛書簡より」では、新版画の開始時期と作家の特定を行った。資料として、個人蔵の3件の資料を用いて、新版画開始に係る問題の解明を行った。

第二章「新版画の制作—川瀬巴水原画について」では、東京都江戸東京博物館所蔵の川瀬巴水の原画を通して、新版画の制作の実態を検討した。江戸時代の浮世絵にも、明治時代の木版にもなかった「原画」の存在を明らかとし、新版画において果たした機能と、制作状況を解明した。

第三章「新版画と日本観光の誘致について—鉄道省ポスターの制作」では、国際観光局の依頼によって制作された川瀬巴水、伊東深水の日本誘致ポスターを資料として扱った。新版画がわが国の国際観光に寄与していた実態の解明を行った。

第四章「版元と海外コレクターの交流—1940年ロバート・ムラー氏の日本旅行を中心に」では、世界最高水準の新版画コレクターであったロバート・ムラー氏のコレクション活動に注目し、特に1940年に行われた日本での収集旅行を取り上げた。ムラー氏のコレクション活動は、これまでわが国では未発表であった。氏のコレクション活動の記録の調査を米国スミソニアン協会サックラー・ギャラリーにて行い、新版画の海外販売についての実態の解明を行った。

第五章「新版画の流通—版元から美術商へ」では、新版画が国際的に広く普及したきつ

(別紙様式 2)
(Separate Form 2)

かけを形成した美術商らの活動を雑誌記事等より扱った。近代において大量の日本美術を欧米各国に販売した山中商会なども含まれ、版元からの販売ルートを追跡した。

第六章「新版画と伝統―「増上寺の雪」の制作と戦後の状況について」では、第二次世界大戦後の新版画の状況を押さえ、戦後の混乱と新版画の終焉の間に行われた文部省の木版画保存事業の詳細を確認した。戦前と戦後の状況の変化と、新版画のなかにある伝統木版技術を残そうとした試みの経緯を明らかとした。

本研究の成果として以下の点が挙げられる。

(1) 大正新版画の確認

序章で取り上げたとおり、大正新版画は、さまざまな経緯を経て、現在の美術史ではほとんど語られてこなかった美術活動であった。本研究において、作品・資料から版元、版画家、コレクターの具体的な本美術活動の動向を明らかとすることができたことは、今後の版画研究にも資すると考える。

時代のさまざまな事象に翻弄されながら、彼らは止むことなく活動を展開させていき、結果として数千点の作品を世に生み出した。その活動により作品を生み出したことのほか、(1) 明治後期の社会における浮世絵再興への待望論に対し、一応の道筋と決着を付けたこと、(2) 伝統木版技術の高度化を実現したこと、(3) 伝統木版技術の継承を現代に導き、寄与したこと、(4) 浮世絵研究を進化させたこと、(5) 創作版画家に刺激を与え、彼らの制作を強化する要因となったこと、などが成果として挙げられる。

(2) 国際的普及の解明

本研究により、これまで明らかでなかった新版画の国際的な受容と販売の実態が明らかとなった。新版画がターゲットとしていたのは、川瀬巴水の風景画は日本では3円、米国では5ドル程度で買うことができたように、国内外の中流層の人々であった。1930年代の米国は大恐慌時代を迎えたが、それよりも版画へのニーズの方が勝り、美術店では品不足に陥っていた。本研究では、これまで取り扱われていなかった資料を使って、海外のニーズに応え、版画というメディアの特性を活かし、他の美術分野よりもいち早く国際化を果たしていた新版画の実態解明を実現した。

(3) 浮世絵との連続性、非連続性の指摘

本研究により、新版画の成立及び構造の解明が進められた。それにより浮世絵との連続性と、非連続性が明らかとなった。連続する部分については、(1) 版元の存在、(2) 共同制作、(3) 作品テーマの設定、といったことのほか、(4) 浮世絵のなれの果ての一形態である輸出用版画との表裏一体の側面を本論では取り上げた。連続していない部分として、(1) 制作の技法、(2) 「画家」の参加、(3) 美術版画としての成立、などがあつた。

以上、本研究は、1915年(大正4)より1960年代初頭頃まで続けられた版元を中心とした美術活動である大正新版画について扱い、その成立、展開、その構造の解明を行った。そのことにより、版画研究及び美術史研究、文化史研究に資することを目的とした。

Summary of the results of the doctoral thesis screening

本論文は、大正4年(1915)に誕生し昭和30年代(1950年代半ば)まで続いた「大正新版画」と呼ばれる美術活動に注目して、その成立と展開、およびその特質と国際的普及を、多くの新しい資料を基にはじめて多角的かつ総合的に考察したものである。これまで「創作版画」に比して研究史上で見過ごされてきた大正新版画を、本論文は日本の美術史・版画史、および国際的な文化交渉史の中に位置付けることに成功している。本論文の構成は以下のとおり2部からなる。以下その概要に即して審査講評を述べる。

第1部では大正新版画の成立とその展開を概観する。第1章は、木版画をめぐる明治時代後期の状況から大正4年の新版画成立に至るまでの社会史的状況を整理するとともに、輸出用版画から新版画への脱皮の過程を、両者の比較を通して考察している。第2章は、関東大震災に至るまでの時期を扱うが、版元、渡邊庄三郎の活動に焦点を当て、その一次資料に肉薄したことが評価される。渡邊が版画家たちとともに進めた浮世絵研究の重要性に着目し、とりわけ新版画がはじめて一堂に展示紹介された「新作板画展覧会」(「板画」は当時の表記)の目録を頼りに、外国人作家を含む多くの版画家を再発掘し、展示作品を網羅的に検討している。第3章では、関東大震災後から昭和前期に出現した、渡邊庄三郎以外の版元や新しい版画家の活動を整理し、作品の表現を手掛かりに世相の変貌を浮き彫りにした。

第2部では豊富な新資料を提示しながらの新版画独特の問題、すなわちその誕生と制作過程の具体的な状況、国際的普及の実態、江戸時代の浮世絵との比較検討を提示し、新版画の文化史的意義を考察している。評価すべき点を列挙するならば、第1章では、渡邊庄三郎が文芸批評家、浮世絵・西洋版画の収集家として著名な小島烏水に宛てた書簡などの具体的な個人蔵資料に着目し、新版画誕生の舞台裏を解明したこと。第2章においては、現存が確認された川瀬巴水の肉筆原画を通して、完成作に至る制作上の試行錯誤を実証したこと。また第3章では、鉄道省の国際観光局の依頼によって制作された川瀬巴水、伊東深水の日本観光誘致のポスターの考察を通じ、印刷部数や価格にまで踏み込み、国家事業への関与の実態を復元・提示したこと。さらに第4章では、アメリカの世界的な新版画コレクターであるロバート・ムラー(あるいはミュラー)関係の未発表資料を、海外調査により今回はじめて明らかにし昭和15年(1940)に日本に旅行した同夫妻の足跡を残された写真や地図から辿るだけでなく、新版画の海外普及の実態を、領収書の分析を通じて作品価格や販売交渉の駆け引きに至る細部まで明らかにしている。加えて第5章においては、版元と美術品輸出商との関係や海外への販売ルートを調査し、新版画の国際的普及状況に見通しを与える成果を収めている。そして最後の第6章では、戦後、文部省主導による「木版画技術の保存事業」の一環として試みられた川瀬巴水の「増上寺の雪」の制作記録の原資料調査を通して、江戸時代以来の分業による木版印刷技術が、無形文化財指定から除外されるに至った行政的経緯を間接的に炙りだした。これによって著者は、伝統文化の再生という課題が戦後に孕んでいた問題を、具体的な例によって克明に浮き彫りにするとともに、「大正新版画」を美術史研究のみならず文化史研究への括がりの内に位置づけることに成功した。

(Separate Form 3)

以上のように、本論文はこれまで見過ごされていた大正新版画に関する新資料を多面的に発掘しつつ、その美術史的・文化史的意義と国際的位置付けを明らかにするという大きな成果をあげている。ただ文献や図版の指示方法、また第1部と第2部とに若干繰り返しの残る点には改善の余地がある。また論文の焦点を大正新版画と版元や製作者に限定するあまり、同時代の文人の発言への言及など、文化的諸情況への踏み込みが稀薄な点は惜しまれる。とはいえこれらの瑕疵は本論文の意義を損なうものではなく、本論文において申請者が示した偏見のない着眼力と、国際的な視野で一次資料を発掘する調査能力は、高く評価できる。以上から、審査員は全員一致で本論文を本専攻の学術博士号授与に相応しいものと認定した。